フィンランドの未来派コーラス4人組

Kardemimmit インタビュー

カルデミンミットは、フィンランドの民族楽器・カンテレとコーラスを用いたオリジナルソングを演奏する女性４人グループ。伝統音楽と現代音楽が融合した彼女たちの曲にはどこかほっとする懐かしさと新しい刺激が混ざり合っている。

<メンバー>
マイヤ･ポケラ Maija Pokela
ユッタ･ラーメル Jutta Rahmel
アンナ･ヴェゲリウス Anna Wegelius
レーニ･ヴェゲリウス Leeni Wegelius

取材･文:北中理咲

４人は10歳の時に「カルデミンミット」という名前のフォーク・アンサンブルを結成した。フィンランド語で「スパイスを調合する」という意味の粋なネーミングを考えた北の魔女っ子４人組。メンバーは双子姉妹のアンナとレーニ、その幼なじみのマイヤとユッタ。音楽教室で意気投合して以来、ずっと４人で歌ってきた。

「とにかく一緒に演奏するのが楽しくて」「今もこうして４人でいられるのがうれしい」

あくまでも純粋。地に足が着いている。そして無垢（むく）な野心も忘れない。

メンバー全員が伝統楽器のカンテレを弾き語る。カンテレの音はハープ風だが、小型のカンテレにストラップをつけて抱いて弾く様子は、ギターのようでもある。アイヌの楽器トンコリのことも思い浮かんだ。甘すぎず、辛すぎず、絵になる立ち姿。座って弾く大型カンテレは、箏や中東のカーヌーンもほうふつさせる。カンテレの何に惹かれたのか？

「美しい響きと簡単に音が出せるところ」「５弦のカンテレは子どもにはちょうどいいサイズだった」「練習するときうるさくないから（笑）」

楽譜はあまり使わない。特別なアイディアや歌詞を覚えるときには書くこともあるが、何よりも即興性を重んじている。

© photo by Lisa Kitanaka

「１週間もツアーをしていると、同じ演奏をするより、即興で変える方が断然楽しい」「自分の声でどんなふうに表現できるかが大事だから」

見事な呼吸で、それぞれのアプローチで歌う。楽曲のテーマによってクリアな声で歌うこともあれば、地声や喉声で色合いを変えることもある。暗いニュアンスを出すときには、北の森の物語性を感じる。

伝統的な詩に曲をつけるとき、脚色することもある。男性視点の封建的なストーリーの結末を現代の自立した女性のために書き換えてしまう潔さ。昔の女性たちの気持ちも救われるように。さじ加減ひとつで魔法もかけられる。

そもそもフィンランドには自然短音階の曲が多い。日本の子守歌に通じるメロディーの曲もありそうだ。そう伝えると、メンバーはうなずき、目の前でフィンランドの子守歌を歌ってくれた。かわいらしい響きに聴こえるが、悲しくてちょっと怖い歌詞もあるのだとか。ベビーシッターの苦悩は、世界共通なのかもしれない。

日本の歌では「ひなまつり」を歌ったことがあると言っていた。フィンランド語も日本語もウラル・アルタイ語族の言葉だから、日本人にとって親しみを感じる響きがあるのかもしれない。と言うと、すぐに「ナミナミ」という声が返ってきた。フィンランド語で「おいしい」という意味らしい。ツアーの食事中に「ナミナミ」と叫ぶと、「大盛りにしますか？」と誤解されると笑っていた。リズミカルなオノマトペ文化。

繰り返しの多い歌詞には小気味よい響きがあり、おまじないの言葉のように脳裏でリピートする。まなざしの強さと柔軟な声。北欧のスパイスがピリリと効いた、かわいいだけではないコーラスと、カンテレの繊細な音色が絶妙に響き合う。脳内デトックスにもよい音楽に違いない。

CD

白夜　MIDNIGHT SUN
演奏：カルデミンミット
収録曲：追い風、金髪、青い雲、ガラスの雹、花嫁の踊り、よそ者、白夜、浅い水、ライラック・ロード
キーヒト・ミュージック／KJT-004
2,700円（税込）
日本語解説付き
お問合せ：ハーモニーフィールズ
0798-42-8070